

2010年6月1日 号外



# JSSH NEWS

## 日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会  
広報・渉外委員会

### 日本手外科学会理事長に就任して

一般社団法人日本手外科学会  
理事長 佐々木 孝

### 目 次

- 理事長に就任して
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 監事紹介
- 第16回秋期教育研修会
- 第5回日米手の外科合同会議
- 編集後記

この度、平成22年4月15日に開催されました総会におきまして理事に選任され、同日に開催されました臨時理事会で理事長にお選びいただきました。理事長制度に移行後5代目の理事長ということになります。これまで4代の理事長は、いずれも手の外科領域で大をなした大学教授でありました。私が、済生会神奈川病院という民間病院の副院長という立場にありながら、日本手外科学会理事長をお受けするという事は、公的機関に民間から起用されるような人事であり、会員の皆様にも驚かれたこととは存じますが、本人が最も驚いております。もとより浅学薄才の身ですので、理事の皆様、委員会委員の皆様、会員の皆様のご支援がありませんと、日本手外科学会の方向性を決めていくことはできません。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

今期の理事会の課題は既に多く挙がっています。前期理事会で三浪明男理事長の強い指導力のもとで推し進められてまいりました法人化は実現し、5月13日に登記を終わりました。日本専門医制評価・認定機構(専認構)への入社(加盟)も平成21年10月29日付で既に認められています。事務局移転の問題も一段落し、本年の評議員会では新事務局による運営が見られました。これらの、前期理事会からの路線を堅持し、一般社団法人としての地固めをするということが与えられた最大の役割と認識しております。

4月の評議員会、総会では学会の名称を「日本手外科学会」と変更する件についてご賛同をいただき、本会は正式には「一般社団法人 日本手外科学会」となりました。長い間「手の外科」に慣れ親しんでまいりましたので、皆様の心の中には惜しむ気持ちが大いにあろうかと存じますが、今後の目標である「広告のできる専門医」や日本医学会への加盟に当たっての必須条件という判断でしたので、どうかご寛容のほどをお願いし、関連の学会、研究会、あるいは教育研修会におかれましても「手外科」との呼称を用いていただけますようお願い申し上げます。

一般社団法人への移行により、評議員制度は代議員制度に変更となり、代議員会＝社員総会となって、これまで学会第1日目に行われていました総会も行われなくなります。代議員は、これまでの評議員とは異なり会員による選挙での選出となり、会員の意見を代弁して議論や決議を行っていくこととなります。4月の評議員会、総会でも説明のあったことですが、組織の大きな変革点ですので、ホームページ上の定款・諸規程に目を通しておいていただきたく存じます。

今期の課題を数えてみますと、手外科学の進歩・発展・普及に努め、この目的で各種委員会、学術集会、研修会のさらなる活動をおこなうことはもちろん基本ですが、①一般社団法人日本手外科学会の初年度を運営し、格別の指摘を受けない決算にもって行く、②「広告のできる専門医」としての許可を申請する、③日本医学会加盟を強力に推進する、④標榜科としての「手外科」を目指す、⑤研修単位登録システムの再検討を行い、現在の本人管理方式から、少なくとも現行の日本整形外科学会方式に改める（受講票の半券を事務局で管理する）、⑥財務委員会を立ち上げ、財務の透明性、公平性を確保し、安定運営を目指す、⑦各種委員会等の活動性を損なわない範囲での予算の縮減を目指し、web上での会議を取り入れる、⑧日本整形外科学会・日本形成外科学会との協力のもとに治療・症例登録を行う筋道までを策定する。以上のように、沢山の課題を抱えているのが現状です。

これらの課題の解決のため、理事、代議員、委員会委員長、委員、会員の皆様と共に歩んでまいりたいと思っております。

どうぞよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

## 副理事長に就任して

副理事長 **土井 一輝**  
(社会保険等委員会担当)

この度、日本手外科学会平成22年度副理事長に就任いたしました。佐々木孝理事長の指導の下に、平田仁副理事長および理事、評議員諸氏と共に、日手会の発展に微力ながら寄与したいと存じますので、会員の皆様のご支援、ご協力をお願いします。

日手会は、専門医制度発足、法人化と大きな改革を成し遂げてまいりました。しかし、専門医制度、法人化もまだスタートしたのみで多くの問題を抱えています。日手会専門医制度は、専認構の社員となりましたが、今後は、「厚生労働省が認定する専門医」として認められるためには、現在の緩い専門医申請条件では困難であります。専門医申請条件として、手術件数、手術内容などの条件を再検討していかざるを得ないと考えます。一方では、法人化に伴う規約の変更、会計問題など、今後、多くの問題が持ち上がってくるものと推測します。これらは、日手会が社会的に認識された団体として発展していくために、避けて通ることのできない過程でありますので、会員の皆様と共に精力的に業務を推し進めて行きたいと存じます。

今後とも、会員の皆様の温かいご理解、ご指導をお願いします。

### 社会保険等委員会

アドバイザー	立花 新太郎	牧野 正晴					
委員長	清重 佳郎						
委員	青木 光広	石突 正文	市川 亨	亀山 真			
	河野 正明	高瀬 勝己	山中 一良				



副理事長 平田 仁  
(財務委員会担当)

この度佐々木理事長より思いもかけず財務担当副理事長を仰せつかり、その重責に身の引き締まる思いがしています。平成20年からの2年間編集担当理事を務めさせて頂きました。三浪理事長、麻生副理事長の下で過ごしたこの2年間は日本手外科学会の50余年の歴史の中でも特筆されるべき激動期でした。日手会は10年前に事務局を九州大学からヒズブレインに移し、その後一旦は大きく発展したのですが、皆さんご存知のように事務局の機能崩壊によりこの数年に深刻な構造問題を抱えていました。三浪理事長の英断により事務局をコングレに移し、悪化した財務の改善に将に理事会一丸となって全力で取り組んできました。その結果、総会でも報告されたように日手会の財務は急速に改善し、事務局移転という大事業を敢行したにも拘わらず750万円ほどの黒字決算となり、従来の慢性的赤字状況からの脱却に成功しました。この間私も理事長命により機関誌発行業務の大幅な見直しを池田和夫編集委員長と二人三脚で必死に取り組みました。他の学会誌の発行状況や必要経費を詳細に調べ、多数の印刷業者と面談をし、また、IT関係の事業者と電子化による合理化の可能性を綿密に協議して抜本的な改革を断行しました。その結果25巻の発刊費用は従来から1000万円近く圧縮でき、同時に査読編集業務をすべてオンライン上で実施可能なシステムを構築することができました。三浪体制では財務改革と並行して長年の懸案であった専門医認定機構への加盟問題も急速に進捗し、今年に入り遂に入社を認められました。また、一般社団法人化に向けた準備もほぼ完了し、近日中に登記申請できるところまで漕ぎ着けました。僅か2年という短期間でこれだけの改革を成し遂げられたのは将に三浪理事長の獅子奮迅の活躍のお陰と一会員として心から感謝していますし、多くの局面で理事会の一員として活動できたことを大変な幸運と感じております。

昨年度は財務状況の改善を優先するため多くの委員会活動が凍結され、また、学術集会開催支援、臨床研究プロジェクトへの補助金支給、トラベリングフェロー派遣等学会の発展に極めて重要な活動にも大きな制約をかけざるを得ませんでした。実際には財務の改善もこれらの活動の抑制に負うところが大きく、この意味では総ての事業活動が正常化する本年度の財務管理が日手会の再活性化という観点から極めて重要だと感じています。無駄な経費は極力抑え、増収にも積極的に務め、捻出した資金を大胆に投入して将来日手会を背負って立つ若い手外科医の育成にあてることこそがこの学会の果たすべき最も重要なタスクだと思います。浅学非才な私ですが、三浪理事長の傍らで学ばせて頂いた教訓を生かして佐々木新理事長の下で日本手外科学会の発展に少しでも貢献できるように尽力したいと意気込んでいます。会員諸先生には益々のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

#### 財務委員会

アドバイザー	麻生 邦一	根本 孝一	松本 義彦
委員長	三上 容司		
委員	島田 幸造	中村 俊康	

## 理事に就任して

落合直之

(広報・渉外委員会担当)

平成16年から1期、用語委員会担当理事に、その後は専門医制度立ち上げ時の試験問題作成に関わってきました。第51回の学術集会会長を経てこの度再度理事就任となりました。新潟での第52回学術集会時の臨時理事会で理事長から広報委員会担当を仰せつかりました。

実は広報委員会に関わるのは2度目です。当時の矢部裕担当理事のもと委員として、日手会パンフレット第1号手根管症候群を作成したことを思い出します。そのパンフレット作成も、その後の担当理事、委員のご努力により種類も増え、DVD化、外国語への翻訳版作成も遡上にあがっているなど継続はまさに力なりを改めて感じております。

一方、その当時から今日まで継続して本委員会が中心となり本学会として取り組んで来たにも関わらず未だ悲願の達成されない課題は、日本医学会加盟です。しかし、これまでの理事長、理事、評議員、会員のご努力によりこの度、日本専門医制評価・認定機構(専認構)に入社(加盟)が決定しました。さらに広告可能な専門医、標榜科の認可を得る上で足かせとなっていた「手の外科」の名称もこの度「手外科」とすることに決まりました。その上「一般社団法人 日本手外科学会」の登記を行うことも決まるなどまさに環境は整ってきました。この機を外さず日本医学会への加盟を実現することが今期の広報委員会の最大の使命と考えております。会員諸氏のお力添えを是非宜しくお願い致します。

また、近年のあらゆるシステムのIT化の流れは、日手会も同様です。これまでの事業の延長として日整会で実施されている会員管理システムとの摺り合わせ、新潟での評議委員会でも取り上げられた専門医単位取得の記録、カード決済の実現を今期の委員会で解決していきたいと思っています。

その他、会員との橋渡しになる日手会ニュース発行、日手会グッズ作成販売なども継続していきます。

偉大な文明を築くことのできた手の機能の治療を担う「手外科」の存在の重要性を国民に広く周知できるようさらに一層鋭意努力致します。

### 広報・渉外委員会

アドバイザー 田中寿一 堀内行雄

委員長 島田幸造

委員 今谷潤也 小野浩史 佐藤和毅 白井久也

藤岡宏幸



## 加 藤 博 之

(試験・研修カリキュラム委員会担当)

理事2期目を務めさせていただきます。1期目は日本手外科学会専門医制度の立ち上げにおきまして、教育研修カリキュラムの整備、手外科専門医試験の実施に活動して参りました。各委員会委員の皆様、評議員及び会員の皆様のご支援とご協力を賜り、何とかこれらの難題が形として残り、本会の財産としてお役に立てるようになっております。これからの任期期間中に私が推進する課題としては、まず手外科専門医試験制度の定着と試験の公平公正化を通じて、手外科専門医が社会に認知され、患者の健康増進に寄与することです。その為には、試験問題の質を吟味し社会に求められる手外科専門医のレベルに合った試験を行う必要があると思っております。今年から、ホームページに過去問題の一部を公開することにいたしました。会員皆様から、試験問題と試験方法に関して御意見、ご要望などを頂ければ幸いです。次に教育研修カリキュラムにおきましては、これまでの教育研修講演受講履歴の整備です。専門医を既に取得された会員の皆様は更新の際には専門医手帳を提出することになります。手帳を紛失されますと専門医の更新が大変に難しくなります。また教育研修講演において必須分野、選択分野などを設けるなどの改革が必要かもしれません。会員の皆様の御意見を聞きながら、社会の要望・常識や患者目線も考慮した専門医制度の改善に尽力して参りたいと存じます。

近年、経済は韓国、中国の発展に日本が取り残されようとしています。手外科におきましても、日本は世界の手外科のトップレベルの座から勢いを失いつつあるように感じています。革新的な日本独自の研究・治療法を発展させ、支援する日本手外科学会のために全力を傾注する覚悟でおります。

## 試験・研修カリキュラム委員会

アドバイザー	鈴木 克 侍	田 嶋 光	和 田 卓 郎
委員長	酒 井 昭 典	清 水 弘 之	
委 員	石 川 浩 三	磯 貝 典 孝	恵 木 丈 柿 木 良 介
	佐 藤 和 毅	瀧 川 宗 一 郎	田 中 克 己 村 田 景 一







## 川 端 秀 彦

(学術研究プロジェクト委員会担当)

平成22年4月に開催された第53回日本手の外科学会総会にて理事にご推薦いただきました。伝統ある日本手外科学会の理事という大任を担うこととなり、大変光栄に思うと同時に責任の重大さを痛感しております。浅学非才の身ではありますが少しでも会員の先生方のお役に立てることができますよう力を尽くす所存であります。私は昭和55年に大阪大学を卒業し、当時の小野啓郎教授の主宰する整形外科学教室に入局しました。大学では多田浩一先生の薫陶を受け、昭和59年に手の外科学会に入会して早や26年が経過したことになります。当初はマイクロサージャリーに興味を持ち、河井秀夫先生や露口雄一先生のもとで再接着や組織移植の研修を積んで、昭和63年にはオーストラリアのMicrosurgery Research Centreに留学し、Bernard McC O'Brien先生やWayne Morrisson先生にもご指導を仰ぎました。その後は平成3年に大阪府立母子保健総合医療センターといういわゆる小児病院に異動した関係で、主として手の先天異常を中心に治療にあたっています。このように専門性の高い手外科の中の、さらに小さな領域に労力と時間の大部分を注いできましたが、平成8年には評議員に推薦されました。当時は専門医制度がなく評議員になることが手外科の専門医の証のようなものであったので、大変うれしく誇りに思ったことを思い出します。委員会活動もこれまでは先天異常委員会に限定されており、委員長を2期4年勤めさせていただきました。その間、毎年手の先天異常懇話会開催の準備のかたわら、手の先天異常分類マニュアルの作成、先天異常手の機能評価法の策定、多指症・合指症のパンフレット作成などを手がけてきました。この度は理事会で三浪明男理事長より学術研究プロジェクト委員会担当理事を命じられました。自分自身もこれを機会に再度手外科を幅広く学びなおしたいと思っております。また機能を再建するという手外科の魅力を、将来の手外科を担う次の若い世代に伝えて行きたいとも思っております。

学術研究プロジェクト委員会は、平成19年第50回日本手の外科学会記念において策定され、平成20年より活動を開始しました。海外に発信しうる学際的な研究を助成することが主な目的です。昨年は種々の理由から研究課題の募集を中断しておりましたが、本年度は仕切り直して募集を再開する予定になっています。世界に向けて発信できるエビデンスに基づいたprospectiveな研究を遂行するためには、研究を多施設共同のプロジェクトとして量・質ともに高いものに育てていく必要があります。緊縮財政の中で新たに設立された委員会ですので、その存在が十分意義あるものであると認められるよう一丸となって活動したいと思います。会員の先生方のご指導、ご支援を宜しく願います。

## 学術研究プロジェクト委員会

委員長 藤 哲

委員 稲垣克記 落合直之 柿木良介 平田 仁

別府 諸 兄





光 嶋 勲  
(先天異常委員会担当)

平成22年4月に開催された第53回日本手の外科学会総会にて理事にご指名いただきました。前回に引き続いて形成外科医としての選出であり理事長はじめ学会の会員の皆様のご配慮に身の引き締まる思いであります。

これまでの2年間は、激動の期間でありその間に手外科学会の理事の皆様から多くを学ばせていただきました。さらに高度の専門知識と技術をお持ちの本委員会の皆様から先天異常に関する知識を教わり、さらに新たな基準の創設に参加させていただきました。これからの2年間さらにこの仕事が継続できるかと思うと今から心がわくわくしております。

先天異常委員会は本年度も香月憲一先生を委員長とした継続体制となります。これまでの目標であった手の先天異常懇話会の充実化、裂手症関連症例の登録継続やFunctional Dexterity Testを用いた母指形成不全症評価nomulticenterstudy開始などの継続、手の先天異常に関する相談システムの構築(新規)を行なう予定であります。また私自身の使命として所属する形成外科学会との橋渡しに努力したいと思っております。手外科専門医のうち形成外科学医は6パーセントで、手外科会員も多くありません。これまでどおり、とくに若い形成外科医に対して手の外科の面白さをアピールしたいと思っております。より多くの形成外科医に手外科学会に参加していただくことが私の使命と考えております。

これからの2年間手外科のために微力ながら頑張っ活動していきたいと思っておりますので御指導、御支援をよろしく願いいたします。

先天異常委員会

アドバイザー 石 田 治 川 端 秀 彦

委員長 香 月 憲 一

委 員 射 場 浩 介 荻 野 利 彦 高 山 真 一 郎 福 本 恵 三

堀 井 恵 美 子



砂 川 融  
(倫理委員会、定款等検討委員会担当)

このたび、新たに「一般社団法人日本手外科」として出発する本学会理事として選出していただき、大変光栄に思うと同時に責任の大きさを痛感しております。若輩者ですが、少しでも会員の皆様のお役に立てるように微力ながら清心誠意努力させて戴きたく存じますので何卒宜しく願い致します。

私は昭和61年に広島大学を卒業後、当時教授に就任されたばかりの生田義和元本学会理事長が主宰されます整形外科教室に入局し、大学院に入学した平成4年から手外科を専門として活動してまいりました。教室ではマイクロ関係を中心に幅広く研鑽を積み、Mayo Clinic留学中は壊死骨



版を刊行するため改訂作業を進めています。今回は、患者立脚型評価、客観的評価の取得方法についての注意点、Performance test、汎用されている医療者による評価法、等について項目を加える予定です。

今後さらに、各種の評価基準、すなわち、「再接着肢・手・指における日手会評価基準」、「尺骨突き上げ症候群に対するPRWE」、「手関節尺側痛新基準」、「Hand 20 (Hand Frontierによる)」、等の妥当性を検証していく予定です。

これから2年間、五谷寛之委員長をはじめ委員の先生方と一致協力して仕事を進めて行きたいと思っております。会員の諸先生におかれましては、宜しく御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

#### 機能評価委員会

委員長 五 谷 寛 之

委 員 安 部 幸 雄 今 枝 敏 彦 大 井 宏 之 百 瀬 敏 充  
森 友 寿 夫



#### 牧 裕

(編集委員会、用語委員会担当)

長年会員の皆さんに慣れ親しまれてきた日本手の外科学会という名称を、日本手外科学会に変える決議がなされ、一般社団法人として学会の体裁を整え、専門医制評価認定機構に加入し、将来的に日本医学会に加盟し、さらに「手外科」を標榜科として認めてもらうことを目標に舵を切った本学会の理事に選ばれたことを誇りに思います。

さて日本手外科学会は、手外科、上肢の外科を自らの専門の一つとして活動している整形外科専門医、形成外科専門医と、このどちらかを目指している整形外科、形成外科の研修医の集まりで、手外科に関する高度な診断能力と治療技術を持った人を、手外科専門医として認定しているのだと思います。整形外科、形成外科専門医資格のさらにその上手外科の専門医資格が乗っているわけですから、専門医として高いレベルを維持することこそが、専門医を頼ってこられる患者さんの期待に応え、また専門医を目指す若い先生方のモチベーションを上げることもつながると考えます。

現在手外科専門医は600名以上、学会員の2割を超えていますが、地域別に見ると東京、大阪など大都市圏に偏在し、一方で一県に専門医数名という地域もあります。専門医を取るための研修場所となる認定研修病院もこれにならって偏在しており、医学部卒業生の初期や後期研修者が大都市に流れる影響もあって、今専門医の少ない県はいつまで経っても専門医は増えないという状況で、各地域の患者さんに対し均等に良質の手外科医療を提供することが難しい状態が続くと思われます。

また専門医の知識、技術の維持向上に関しては、5年間20単位の学会参加や教育研修講演の受講だけでは心もとなく、新たな研修システムが必要になるでしょう。もちろん専門医1人ひとりが自己責任で自分を高める努力も必要ですが、これをサポートし、学会として専門医の技量を患者に保障できるようになれば、専門医を持つ学会としては最高だと思います。当学会もまだまだいろいろな問題を抱えて法人として船出したわけですが、将来法人化、専門医制の立ち上げは成功だったと評価してもらえるよう、佐々木理事長、土井、平田副理事長を支えていきたいと考えております。

(財)新潟手の外科研究所も公益財団として開設から25年目となりました。毎年手の外科セミナーを開催し多くの方に参加していただいておりますが、対象は手の外科診療を数年経験した人としてきました。専門医制度が発足した今後は、専門医レベルの人を対象としたセミナーも必要と考えております。

#### 編集委員会

アドバイザー 平 田 仁  
 委員長 池 田 和 夫  
 委員 尼 子 雅 敏 岩 崎 倫 政 岡 島 誠 一 郎 長 田 伝 重  
 酒 井 昭 典 藤 尾 圭 司 松 崎 浩 徳

#### 用語委員会

アドバイザー 岡 義 範  
 委員長 黒 島 永 嗣  
 委員 池 田 全 良 武 石 明 精 坪 川 直 人 松 村 一  
 渡 邊 健 太 郎



### 矢 島 弘 嗣

(教育研修委員会、資格・施設認定委員会担当)

今年から2期目の理事として、再度教育研修委員会と専門医資格認定委員会、そして新たに専門医施設認定委員会を担当することになりました市立奈良病院四肢外傷センターの矢島です。一般社団法人日本手外科学会に生まれかわるに伴って、専門医制度委員会が資格・施設認定医委員会と試験・研修カリキュラム委員会の2つに統廃合されたことにより、前回の仕事からさらに施設認定の仕事が加わることになりました。理事長からこの命を受けまして責任の重さを痛感しており、何とかこなしていかなければならないと考えているところです。

さて、教育研修委員会の運営に関しましては、アステラス製薬と久光製薬にそれぞれ春の講習会ならびに秋の講習会のサポートをしていただき、事務局が移ったにもかかわらず順調に運営することができました。この両企業に対しては日本手外科学会の会員を代表してこの場を借りて深謝致します。また、今後秋の講習会(ベシックコース)は専門医受験の必須項目となりましたので、さらに充実させるように委員の先生方ががんばっていきたくと考えております。以上のような理由から、若い先生方におきましてはできるだけ秋の講習会に出席して頂きますようお願いする次第です。専門医受験に際する書類の認定に関しましては、多くの先生方がきちっとした書類を提出されてこられましたので、ほとんど問題なく審査して参りました。ただ2年後には多くの専門医の先生方が再認定を受けることとなります。現状では先生方が受講されてこられた認定単位のバックアップがないに近い状態です。この最大の原因は事務局移転に伴う諸事情によるもので、何とか早急に認定単位のバックアップシステムの構築を、新事務局とともに行いたいと考えております。しかしながら昨年までのバックアップがないために、専門医手帳しか証明するものがございません。この

件に関しましては私が担当理事になってから幾度も注意を喚起するようにお伝えしてきたつもりですが、もう一度先生方には専門医手帳のコピーをとって保管して頂きますように強く要望致します。施設認定に関しましては今回から初めて担当させて頂きますので、奥津アドバイザーを中心とした委員会でこれまでどおりに業務を進めていこうと考えております。

以上所信表明ではありませんが、私が考えていることを書かせて頂きました。教育研修、資格・施設認定ともこれからの若い世代に関わることであり、微力ではありますが日本手外科学会の発展に少しでも寄与していきたいと思っておりますので、会員の先生方のご協力をお願い申し上げます。

#### 教育研修委員会

委員長	高 原 政 利			
委 員	青 木 光 広	酒 井 直 隆	清 水 弘 之	田 中 克 己
	信 田 進 吾	日 高 典 昭	山 本 謙 吾	

#### 資格・施設認定委員会

アドバイザー	奥 津 一 郎	中 島 英 親		
委員長	宮 坂 芳 典			
委 員	秋 田 鐘 弼	内 山 茂 晴	沖 永 修 二	近 藤 真
	関 谷 勇 人	辻 野 昭 人		

## 監事紹介

岡 義 範 立 花 新 太 郎

## 関連学会・研究会のお知らせ

### ◆第16回 秋期教育研修会◆

会 期：平成22年(2010年)9月4日(土)・5日(日)

会 場：奈良市/奈良県文化会館

\*詳細については、追ってHPに掲載いたします。

### ◆第5回日米手の外科学会合同会議◆

会 期：平成23年3月26日(土)～29日(火)

会 場：アメリカ合衆国ハワイ

名誉会長：中村 蓼吾 (中日病院手の外科センター)

大会長：三浪 明男 (北海道大学医学部整形外科)

詳細は <http://www.congre.co.jp/5jassh>

## 編 集 後 記

新理事長、新理事の就任に伴い 日手会ニュースの号外が発行されました。ご多忙中にもかかわらず執筆いただきました先生方には深謝いたします。本学会は本年5月に正式に「一般社団法人日本手外科学会」となりましたが、理事長・理事の先生方がお話になっているように課題も山積しております。広報・渉外委員会も、会員管理や専門医単位管理などのIT化も推し進めていくようさらに努力をいたしたいと存じます。会員の皆様の一層のご支援をよろしくお願いいたします。

(文責 小野浩史)

### 広報・渉外委員会

(担当理事：落合直之    アドバイザー：田中寿一、堀内行雄    委員長：島田幸造  
委員：今谷潤也、小野浩史、佐藤和毅、白井久也、藤岡宏幸)